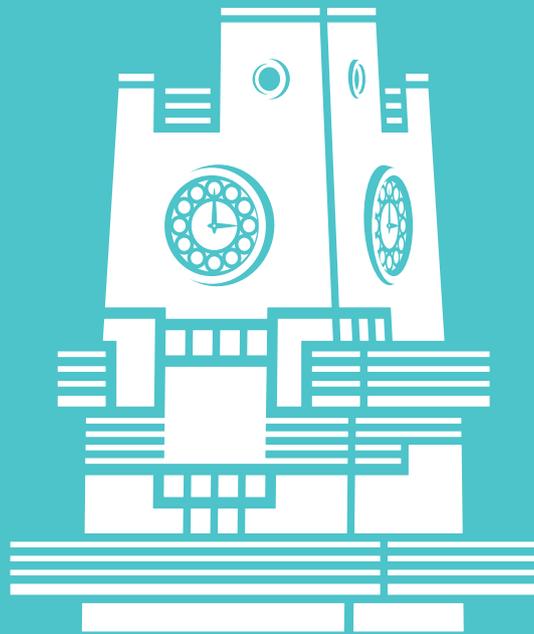


RCAST

Research Center for Advanced Science and Technology NEWS

99

2017
Vol.2



30周年を機に、先端研のロゴを刷新！

先端研ロゴリニューアル

先端研探検団Ⅱ file 20

イノベーションの館・13号館

先端研探検団Ⅱ 番外編

ラボ撮影裏話

Relay Essay

先端とは何か 第22回

コミュニケーション科学分野

田中 久美子 教授

先端研の最新書籍紹介

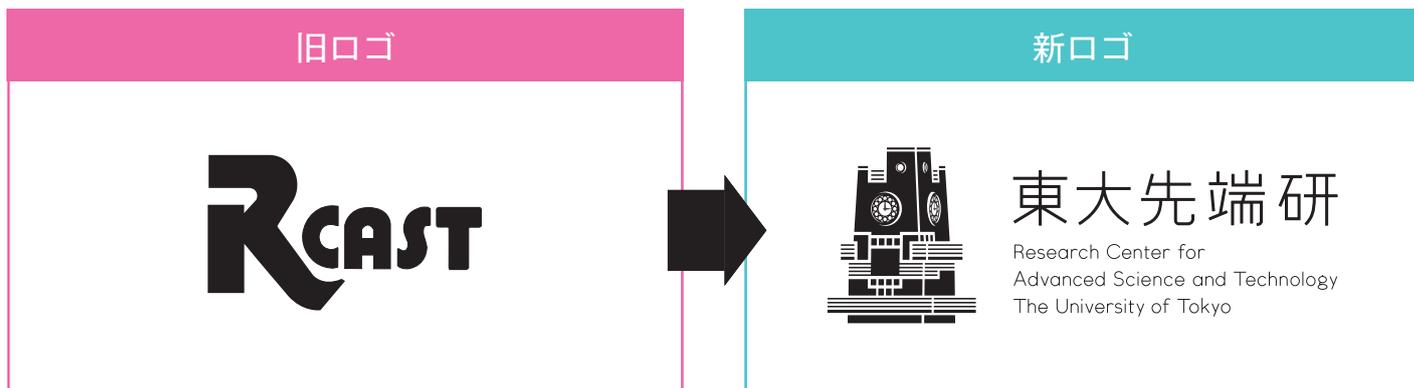
『ブレイクスルーへの思考』



先端研 30th
ANNIVERSARY

東京大学先端科学技術研究センター

30周年を機に、 先端研のロゴを刷新！



これまでの先端研のロゴは、英文の略称を用いたデザインでした。しかし、これでは「先端研」という通称名を認識させることは難しく、広く浸透させる力も弱いと感じていました。所内からも、そのような声を聞くことがあったのも事実です。

新たな節目となる30周年を機に、常に異端児であり続ける先端研のDNAはそのままに、世界トップクラスの研究を行う力や、次のステージへと変化し続ける現在と未来の先端研を象徴するロゴを作りたい。そんな所長・副所長の思いが、今回、ついに実現しました。

デザインは、中邑・近藤研究室の客員研究員でもある神原秀夫さんです。



今回、新しいロゴデザインのお話をいただいたとき、RCASTの「R」や先端研の「S」をモチーフにすることも考えました。でも、「それが先端研を表現するのにふさわしいデザインなのか？」「そのロゴを見て先端研を想起できるのか？」「50年後も陳腐化しないデザインになり得るのか？」と問うたとき、自分の中ではGOが出なかったんです。

先端研の雰囲気や空気感、共通認識されているイメージをロゴにできないかと考えていたところ、13号館の時計台をモチーフにするというコンセプトを思いつきました。

初めて先端研に来たとき、コンクリート打ちっ放しの近代的な建物と、歴史ある13号館、14号館に寄り添う豊かな緑のコントラストがとても印象的だったんです。先端研を取材するメディアも、たいてい正門から13号館を映します。先端研を訪れる方々も、ここに来るとまず13号館が目に入る。つまり、印象に残るんです。そして、風格もある。さらに、13号館は国の登録有形文化財に指定されていますから、壊されることもない。一番ブレずに先端研を表現できると思いました。

神原 秀夫 [Hideo Kambara] プロダクトデザイナー／アートディレクター

1978年広島県生まれ。東京造形大学卒業後、TOTO、電通を経て、BARAKAN DESIGNを設立。プロダクトのみならず、グラフィックやインテリアなど幅広いデザイン領域で活動を展開。ニューヨーク近代美術館パーマネントコレクションやD&AD賞、iFデザイン賞など受賞多数。

2016年10月12日 神原さんからデザイン方向性の提案 @所長室

実は、過去に先端研のロゴをリニューアルする話が持ち上がったとき、神原さんに相談をしていました。諸事情あり、そのときは実現しませんでした。今回、やはり神原さんにお願いしよう、ということになりました。

神原さんの心境

2012年ごろに一度、先端研のロゴをリニューアルするという話が持ち上がったのですが、結局ベンディングになりました。でも、その後もずっと「先端研にふさわしいロゴデザインとは何か」を、頭の片隅で考えていました。

神原さんより13号館をモチーフにしたかどうかという提案をいただき、13号館をモチーフとして考えた理由などを伺いながら、デザインの方向性を探りました。打ち合わせに向けて東大施設部から取り寄せた当時の設計図などを見た神崎所長と中村副所長は、気持ちが盛り上がってきた様子でした。

神原さんの心境

デザインに入る前に、取り寄せていただいた設計図や歴史を読み込んだり、実際に時計台に上ったりしていると、13号館の風格を肌で感じました。ロゴマークにパースをつけたのは、その風格を表現するためです。



▲神崎所長と中村副所長に前回の経緯を説明する神原さん



▲13号館の設計図を見て前のめりになる神崎所長

フルバージョン



東京大学 先端科学技術研究センター
Research Center for Advanced Science and Technology
The University of Tokyo

日本語
バージョン



東京大学
先端科学技術研究センター

英語
バージョン



Research Center for
Advanced Science and Technology
The University of Tokyo

新しいロゴのモチーフ・13号館を西村幸夫教授(先端研前所長)が解説！

イノベーションの館・13号館

先端研の新しいロゴマークのモチーフとなった13号館は、2000年10月に国の有形文化財として登録され、東大の時計台として広く知られています。しかし、建築やデザイン、そして根底に流れる思想は、他の時計台とは全く異なるのだとか。今回は特別に、日本イコモス国内委員会委員長で前先端研所長の西村幸夫教授に、13号館の建築について、歴史を紐解きながら解説していただきました。



西村 幸夫 大学院工学系研究科 教授 Yukio Nishimura

1952年福岡県生まれ。博士(工学)。2011年より2013年まで東京大学副学長、2013年より2015年まで先端科学技術研究センター所長。日本イコモス国内委員会委員長、日本ユネスコ協会連盟未来遺産委員会委員長等をつとめる。代表作『都市保全計画』(東京大学出版会)は、歴史的環境保全の必要性を解いた原論から、歴史、制度、技法、実践例までを網羅した名著。

伝統的な権威を否定する

13号館は、関東大震災後の1929年に移転した航空研究所の本館として建てられた。「関東大震災後の東大の建物のほとんどは、当時営繕課長を兼務していた建築家で東大教授の内田祥三先生の設計です。建物入口のアーチ、左右対称形、淡褐色スクラッチタイルの使用などに特徴があり“内田ゴシック”と呼ばれています。内田先生は東大キャンパスの基本設計を行い、手描きで1/200の図面まで起こされました」。内田氏は基本設計以外のインテリアやディテールなどを優秀な若手に任せ、当時部下だった岸田日出刀氏が登用された。「記録が残っていないので断言は難しいですが、内田先生と岸田先生ではデザインの指向性が全く違うんですよね」。特に13号館など駒場リサーチキャンパス内の建物は内田氏の部下だった岸田氏のセンスが色濃く出ていると、西村教授は言う。実は、公の記録は残ってなくとも、先端研二十年史^{*)}では内田氏の談話速記録を調べ、内田氏本人はほとんど13号館の

設計に携わっていなかったという記録を残している。

「岸田先生は、19世紀から20世紀のヨーロッパの建築思想、特に保守的な表現から離脱して、美術、文学、音楽などのあらゆる芸術を一つの総合的芸術作品として融合する運動“セセッション”の影響を色濃く受けています。ガラスを使った曲面や、円と直線で描かれる幾何学的な模様などはその最たるもので、それまでの建築の主流だった装飾的なディテールを否定する、つまり“古い権威の否定”が表現されているんです」。とはいえ、基本設計は内田氏の監修を受けているはず。「内田ゴシックという師匠の形の中で、岸田先生ご自身のオリジナリティを出すという、非常に矛盾を孕んだ建築物が13号館です。いやあ、本当に興味深い」と声が熱を帯びる西村教授。「少なくとも当時の帝国大学の時計台ですから、まさに権威の象徴です。基本的に、権威を象徴する建物というのは、左右対称で表現されます。裁判所などもそうですね。東大の時計台として広く知られる本郷の安田講堂も、教養学部の旧第一高等学校本館も、左右対称、時計台の部分も垂直で、本来の



▲本郷 安田講堂



▲教養学部 1号館(旧第一高等学校本館)



13号館を手掛けた内田先生、岸田先生について

■ 内田 祥三(1885-1972)

第14代東京帝国大学総長。建築学科の教授と営繕課長を兼務し、総合大学は統一キャンパスにすべき、という考えに基づき、安田講堂の建設をはじめとする関東大震災後の東京大学構内の復旧計画を進めた。

■ 岸田 日出刀(1899-1966)

東京大学講師、助教授を経て教授。内田祥三の下で東京大学構内の復旧計画に参加。建築の造型意匠の権威として知られ、前川国男、丹下健三など、現代の日本建築界で活躍する建築家を育成した。

ゴシックらしい建ち方です。ところが、13号館はどうですか？ 時計台の塔が台形になっていませんか？ こういったディテールまで見ると、大学のシンボルである時計台を従来とは違う形でつくろうという冒険心、古いものを壊してこれまでにない新しいものをつくる、当時の最先端があふれているわけです」。

制約の中で解き放つオリジナリティ

実際に、13号館の時計台部分は左右非対称なデザインになっている。時計と窓の位置関係、煙突の見え方など、4方向それぞれ、同じ表情はひとつもない。「正面は左右対称かと思いきや、左側の煙突が均衡を破っています。あれだって、いくらでも隠せるはずなのに、敢えて見えるように付けている。正面以外の側面も、時計の丸と窓の四角が重なっていたり、扉の長方形、窓の正方形、正方形の窓を横に並べた長方形などの配置がそれぞれ異なったりします。丸と四角といった幾何学模様の組み合わせは、内田氏が設計の際に参考にしたとされる中世の修道院のようなネオ・ゴシック様式では見られませんが、ある意味これは、“モダニズムによる反乱”ではないかと。ここに岸田先生の主張が表現されているように、私は感じてしまうんですけどね」と西村教授。「この幾何学模様の組み合わせ方は、13号館より前の1926年に完成した東大の広報センターと非常に似ています。広報センターの窓は縦長と横長の2つの長方形が重なっていて、13号館の時計と窓の関係を彷彿とさせます。話が逸れますが、ゴシックではあり得ない太い円柱も13号館正面玄関と共通するものがあり、明らかに岸田先生のデザインだなあと感じます。公の記録としては残っていませんけどね」。

時計台の建築も時系列で追うとさまざまな発見があった。西村教授が解説するとおり、13号館より先に完成した安田講堂と旧一高本館の時計台はきちんと左右対称で、文字盤は正方形を45度回転させたひし形の枠におさまっている。一方、13号館は丸い文字盤をスクラッチタイルで囲うのみ、数字に至っては手描きのようなフォントで、楽しそうな印象すら受ける。「13号館の後にできた小石川植物園本館も岸田先



▲内田ゴシックの特徴
ポインテッドアーチ

スクラッチタイル▶



▲正面



▲グラウンド側



▲生産技術研究所側



▲先端研側

生がつくられていますが、明らかにもっと自由ですよ。もう、時計自体が正面ではなく側面についているし、時計は外壁に直接ワイヤーで描いているような作りです。岸田先生にとっての13号館は、本郷から離れた場所で、本郷で学んだことを生かしながら、自由にご自身のカラーを発揮するきっかけになったのかもしれない。歴史を読み解き、地域の個性を活かしたまちづくりを行う西村教授ならではの洞察が興味深い。事実、本郷の安田講堂と教養学部の旧一高本館の2つは、内田氏が一体感を持ちうるよう工夫して設計したとされている*2。本郷からも教養学部からも距離を置いたこの場所が、岸田氏のオリジナリティを表現する新たな挑戦を後押ししたのかもしれない。

新たな表現に挑んだ「イノベーションの館」

西村教授によると、岸田氏はちょうど13号館が建てられていた頃、日本の伝統建築の中に近代の美を見ていたのだという。「岸田先生は、神社が大好きだったんです。曲線を使う寺院建築は大陸文化の流れを汲んでいます。直線だけで構成される神社建築にこそ日本建築の美しさが宿っていると考えていたようです。彼が考えるモダニズムの美学につながっていたのでしょうか。あの時代にライカを持って、自らの視点で京都御所や神社のディテールを撮影した写真集も出しています」と解説する西村教授。京都御所をはじめ、多くの日本の古建築の写真と解説を掲載した岸田氏の著作『過去の構成』は、伝統的な日本建築に新しい魅力を吹き込んだ名著として知られている。「私は、13号館時計台の斜めの角度は、鳥居の角度じゃないかと思っています」。

「鳥居は、縦2本、横2本という直線だけでシンボルをつくり出します。岸田先生は、ほんのわずかな直線だけで、何かすごく象徴的な空間をつくらうとをしたのではないかと思うんです。これまでにない発想で、ご自身の考えるモダニズムの手法を取り入れた象徴的な空間を、建物の中に取り入れる挑戦をしたのではないかと。これは完全な私の妄想ですが、そう感じるんです」。西村教授は所長時代、先端研の紹介をする際にはいつも、先端研設立に至る激動の歴史とそこに息づく「過去に囚われず前例をつくり出す」先端研のDNAについて触れていた。「これまで権威の象徴とされていた左右対称ではない、新しい形の象徴をつくる。私は、やはりそこに、イノベーションの魂を感じるんです。既存の権威を否定し、完全にフラットな形で物事を考えていたり、それまでにない形をつくることに、まったく臆さない思想。時計台以外にも、13号館にはたくさんの、通常ではあり得ないディテールが存在します。13号館には、そういう思想があふれているんです。「イノベーションの館」なんですよ、まさに。先端研がいるにふさわしい場所なんです」。



▲太い円柱と幾何学模様が印象的な本郷の広報センター



▲13号館玄関には存在感のある円柱が。扉と窓は丸と四角で構成されている



▲小石川植物園本館は、円柱を切ったような時計台。時計は正面ではなく側面に。

*1 『東京大学先端科学技術研究センター 二十年史』P.216

*2 東京大学ウェブサイト『国の登録有形文化財 指定』より

【写真提供】

教養学部1号館：東京大学大学院総合文化研究科・教養学部

広報センター：東京大学本部広報課

本郷安田講堂、駒場リサーチキャンパス1号館、13号館、17号館：宇戸浩二（撮影）

百聞は一見にしかず。岸田氏の個性が光るデザインをほんの一部だけご紹介！

東大時計台の時計を比べてみると…？

安田講堂



安田講堂と教養学部1号館は、一体感を持つよう設計されているため、時計部分も似ている

教養学部1号館



13号館



壁と一体化した時計
数字のフォントも個性的

小石川植物園本館



もはや文字盤まで壁と一体化し、さらに自由に

正面玄関にもこだわりが

内田ゴシックには見られない幾何学的な模様が施されている



▲13号館入口の扉



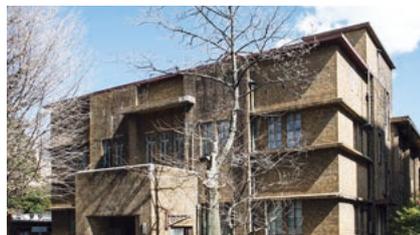
時計台の塔のあの傾き、鳥居に見えませんか？ 私には、そう見えるんです



▲熱く解説する西村教授

駒場リサーチキャンパスで楽しむ、岸田モダニズムの変遷

1号館(1928年完成)



水平線を強調したモダンなデザインからは、建物内に巨大な風洞があることがわからない。西村教授いわく「中の機能を外に見せないデザイン」

13号館(1929年完成)



中央の一段下がった窓は階段の踊り場の位置。自然な明かりを取り入れられるよう、「中の機能をそのまま外観に反映する機能主義的なつくり」の第一歩

17号館(1929年完成)



左の縦長の窓は、階段に自然光を取り入れるため段々に配置されている。右の横長の窓はモダニズム。「階段の機能をそのままファサードのデザインに反映させている、機能主義的なデザインです」

先端研30周年ウェブサイトでは、西村教授による詳しい解説を公開しています → <http://30th.rcast.u-tokyo.ac.jp/>

ラボ撮影裏話

先端研30周年記念事業の1つとして、現在、ラボを訪問し、撮影を行っています。今回は、その撮影のオフショットとしてお宝写真(?)を一部ご紹介します。

彼らも立派なメンバーです

ラボメンバーの撮影中、どこからか視線を感じるとしたら、こんな仲間たちもいました。



稲見研の黒幕？影からこちらを見てました。



浜窪研の守り神？スマイルを浮かべているのがいいですね。



西成教授室のソファには先客が。



高橋研の重要メンバー。この方も集合写真に入りました。

整理整頓！

超スタイリッシュなラボもありましたが、今に雪崩がおきそうなラボも。個性あふれる居室です。



これが普通です、と余裕で写る油谷教授。



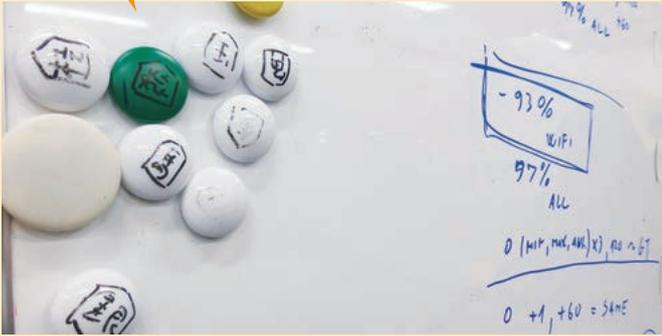
論文提出前の近藤研学生居室…。



奥の部屋には図書室以上の本がある池内准教授。

遊んでませんよ！

実験機器やマシンが並ぶラボの中を見ても、そこかしこに遊びゴコロを発見。大事ですよ。



森川研には謎の手書き将棋。



渋滞解消に悩む(?)西成研のとあるデスク。



そう言ってもらえると嬉しいかも。岡本研①



ユルさに和む岡本研②



ワンポイントがカワイイ藤田研。

撮影の裏で…

はいポーズ！で撮った写真だけではわからない舞台裏の様子。こっちのほうが自然だったりします。



フリのつもりが真剣講義になった新谷教授



撮影中のつまみ食いが見つかりニラみを入れる？年吉教授

そして、次のステージへジャンプ！ 先端研OB・OGが、先端研へのエールを全身で表現！（これはプロが撮影）



勢いで勝負！のOB陣



しなやか・軽やか♡OG陣

撮影：宇戸 浩二

写真撮影の成果は、今秋をお楽しみに！ [注]もちろんプロ撮影です

熊本県及び熊本大学との間で 包括的連携に関する協定を締結

4月10日、先端科学技術研究センターと熊本県及び熊本大学との間で、平成28年熊本地震からの創造的復興を達成し、復旧・復興を熊本の更なる発展につなげるとともに、「災害に強く誇れる資産を次代につなぎ夢あふれる新たな熊本の創造」に資することを目的として、包括連携の協定の締結式がとり行われました。

熊本県庁にて行われた締結式では熊本県・蒲島郁夫知事と熊本大学・原田信志学長、先端科学技術研究センター・神崎亮平所長が署名捺印を交わしました。

この連携では、高齢者の就労支援、障害者の就労支援、地元企業のイノベーション支援、震災アーカイブなどの分野で、研究交流、産学官連携、人材育成等を進めていくことを想定しています。

先端研ではこれまで、東日本大震災以後「震災アーカイブプロジェクト」において、分野横断的に震災復興支援のあり方について議論を重ね、また研究室単位で様々な復興支援を行ってきました。この締結を契機として、先端研は持ち味である先端研究をもとに、熊本県・熊本大学両者と密に連携・協力しながら、熊本の復興支援のために様々な取り組みをさらに進めていく予定です。



▲締結後の記念撮影。左から先端研 神崎所長、熊本県 蒲島知事、熊本大学 原田学長



▲締結書に署名をする熊本大学 原田学長(左)と先端研 神崎所長(中)



▲熊本県知事室にて、締結前の様子

フランスIHESTが駒場リサーチキャンパスを訪問

4月4日、フランスIHEST(Institut des hautes études pour la science et la technologie・仏科学技術高等研究院)の46名が、国際レベルでの科学技術と政策に関するケーススタディ研修の一環として、桜が満開の東京大学駒場リサーチキャンパスを訪れました。先端研ENEOSホールにて、羽田国際担当理事から「東大の国際戦略について」、東大TLO山本社長より「大学研究とTLOの役割について」の講演を聞いた後、一行は2012年に先端研に設置されたエネルギー研究開発連携拠点(NextPV)の研究室と生研LIMMSの研究施設を見学しました。慌ただしい訪問ではありましたが、みなさん大変満足してキャンパスを出発されたようでした。



▲羽田理事による先端研NextPVの紹介

加藤内閣府特命担当大臣(働き方改革担当)が 先端研を訪問

3月23日、加藤勝信内閣府特命担当大臣(働き方改革担当)が、多様な学び・暮らし・働きができる社会の実現に向けた研究と取り組みの視察のため、先端研を訪れました。

加藤大臣は、人間支援工学分野の中邑賢龍教授と近藤武夫准教授より、先端研での取り組みと異才発掘プロジェクト「ROCKET」や障害者の超短時間雇用プロジェクト「IDEA」、障害児の高等教育進学支援産学連携プロジェクト「DO-IT Japan」の説明を受けたあと、実際にROCKETとIDEAプロジェクトの活動現場を視察され、教員や参加者と意見交換をされました。



▲近藤准教授(右)より障害者の超短時間雇用プロジェクトの説明を受ける加藤内閣府特命担当大臣(中)

富士電機(株)・先端研「第三回AI交流会」開催

3月10日、富士電機(株)・先端研のAI交流会が開催されました。2016年度3回目となる本交流会は、理化学研究所 革新知能統合研究センターのセンター長となった東京大学の杉山将教授をはじめ、情報理工学系研究科の高野渉准教授、先端科学技術研究センターからは稲見昌彦教授、檜山敦講師らが研究紹介を行いました。

昨今のAIブームの中心となる機械学習と、今後のAIの応用展開についてディスカッションも行われ、過去3回の交流会のうち参加者数が最大となりました。様々な方面の注目度も高い、盛況な会となりました。



▲研究紹介の様子

鹿児島県の池田学園中学・高等学校の高校生6名が 先端研油谷研究室を訪問

3月9日に、SSH(スーパーサイエンスハイスクール)にも指定されている鹿児島県・学校法人池田学園の高校生6名が、科学技術関連施設研修の一環として、先端研の油谷研究室(ゲノムサイエンス分野)を訪れました。

油谷浩幸教授がスライドを用いて「がんの発生段階や遺伝性変異のメカニズム」についての説明を行うと、参加した高校生は熱心にメモを取り講義に集中していました。講義中に、引率の先生と油谷教授が白熱した質疑応答を展開するといった珍しい場面もあり、ゲノムサイエンスへの関心の高さとともに、引率の先生や生徒たちの意欲的な姿勢が印象的な講義となりました。

また、講義の後に解析システムも見学し、見学後には参加した高校生からは研修後も多くの質問が寄せられました。



▲講義を受ける前の様子。この後、白熱講義(?)が展開された

人事情報 **HR**

採用・任命・転入等

発令日	氏名	職名	受入研究室
2016年12月1日	Jehl Zacharie Victor Samuel Nathanael	特任助教	岡田研究室
2017年3月1日	Haupt Stephan Shuichi	特任助教	神崎研究室
2017年4月1日	田淵 豊	助教	中村・宇佐見研究室
2017年4月1日	杉山 太香典	特任助教	中村・宇佐見研究室
2017年4月1日	玉手 修平	特任助教	中村・宇佐見研究室
2017年4月1日	臼井 翔平	特任助教	田中研究室
2017年4月1日	中田 陽介	特任助教	中村・宇佐見研究室
2017年4月1日	鹿野 豊	特任准教授	中村・宇佐見研究室
2017年4月1日	杉山 正和	教授	杉山研究室
2017年4月1日	脇坂 崇平	特任研究員	稲見研究室
2017年4月1日	白坂 将	特任研究員	小谷研究室
2017年4月1日	竹内 真純	学術支援 専門職員	西成研究室
2017年4月1日	辻田 匡葵	特任研究員	熊谷研究室
2017年4月1日	城山 優治	特任助教	児玉研究室
2017年4月1日	泉山 壘威	助教	小泉研究室
2017年4月1日	渡邊 誠	准教授	近藤研究室
2017年4月1日	喜多山 篤	特任助教	所長室
2017年4月1日	佐藤 弘樹	専門員	事務部
2017年4月1日	翺持 保行	専門員	事務部
2017年4月1日	起 健二	係長	事務部 施設・安全
2017年4月1日	中井 珠美	主任	事務部 人事給与
2017年4月1日	中井 麻祐子	主任	事務部 企画調整
2017年4月1日	金子 詩歩	一般職員	事務部 財務企画

退職・転出

発令日	氏名	職名	転出先
2016年12月15日	栢沼 愛	特任研究員	筑波大学 助教
2017年3月31日	鈴木 誠	助教	
2017年3月31日	山崎 歴舟	助教	JST さきがけ研究員
2017年3月31日	平林 ルミ	助教	東大先端研 特任助教(短時間)
2017年3月31日	六角 美瑠	特任助教	東大先端研 特任助教(短時間)
2017年3月31日	出村 雅彦	特任教授	物質・材料研究機構 主幹研究員
2017年3月31日	古川 千奈実	特任専門職員	東大先端研 学術支援職員(短時間)
2017年3月31日	千本松 美佐	特任専門職員	東大先端研 岡田研究室 特任専門員
2017年3月31日	西岡 潔	特任教授	東大先端研 研究顧問
2017年3月31日	柴崎 芳一	特任教授	東大先端研 特任教授(短時間)
2017年3月31日	鈴木 信周	特任助教	
2017年3月31日	Cassim Laila Frances	特任助教	東大先端研 特任助教(短時間)

2017年3月31日	垣内 美和子	特任研究員	Columbia University Medical Center Postdoctoral Research Scientist(常勤)
2017年3月31日	中田 裕美	特任研究員	
2017年3月31日	飯嶋 麻里子	特任研究員	東大先端研 特任研究員(短時間)
2017年3月31日	近岡 洋子	特任研究員	東大アイソトープ総合センター 特任研究員
2017年3月31日	中山 綾	特任研究員	東大アイソトープ総合センター 特任研究員
2017年3月31日	田口 純子	特任研究員	東大先端研 助教
2017年3月31日	伊津野 仁史	特任研究員	
2017年3月31日	Nem Khan Dim	特任研究員	
2017年3月31日	小倉 暁雄	特任研究員	宇宙航空研究開発機構宇宙航空 プロジェクト研究員(常勤)
2017年3月31日	小川 雄太郎	特任研究員	
2017年3月31日	Vijay Srinivasan Murugesan	特任研究員	
2017年3月31日	Cojocar, Ludmila	特任研究員	
2017年3月31日	大原 壮太郎	学術支援 専門職員	
2017年3月31日	川上 綾子	学術支援 専門職員	
2017年3月31日	馬郡 健太	特任研究員	
2017年3月31日	浅田 晃祐	特任研究員	白鷗大学 准教授
2017年3月31日	朱 浩	特任研究員	京都大学 博士研究員
2017年3月31日	相見 治義	専門員	東大史料編纂所 財務・研究支援チーム 専門員
2017年3月31日	金子 利	特任専門職員	東大先端研 特任専門職員(短時間)
2017年3月31日	大谷 晴美	一般職員	東大先端研 学術支援専門職員(短時間)
2017年4月1日	森川 博之	教授	東大大学院工学系研究科 教授
2017年4月1日	高曾根 宏明	副事務長	群馬大学 人事労務課長
2017年4月1日	島本 里美	主任	東大医学部・医学系研究科 財務係主任
2017年4月30日	山本 竜児	特任研究員	University of Hawaii Cancer Center Postdoctoral Fellow(常勤)

受賞 **WINNING**

2017年3月23日

高橋研究室(光製造科学分野)の鈴木 裕貴さん(大学院工学系研究科精密工学専攻M2)が工学系研究科長賞(研究最優秀)を受賞
修士論文題目「エバネッセント露光型多光束干渉造形法による表面微細構造創製技術の開発」

活動報告 **REPORT**

【プレスリリース】 <http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/pressrelease/>

2017年4月18日

中邑・近藤研究室(人間支援工学分野)
◇障がい児の学習・生活支援を行う「魔法のプロジェクト2017 ~魔法の言葉~」協力校決定 ~特別支援学校など54校にタブレットやロボットを合計158台貸し出し~

2017年3月31日

中邑・近藤研究室(人間支援工学分野)
◇障がい児の学習・生活支援のための携帯情報端末活用事例報告書を発行
～「魔法のプロジェクト2016～魔法の種～」協力校での活用事例をまとめ、ウェブサイトで公開～

2017年3月1日

大澤 毅 特任助教(システム生物医学分野)、近藤 彩乃 博士課程学生(当時)、油谷 浩幸 教授(ゲノムサイエンス分野)
◇酸性環境における腫瘍の悪化にコレステロール代謝制御タンパク質が寄与することを発見

[研究成果]

2017年4月11日

谷内江 望 准教授(合成生物学分野)
◇生命科学研究を推進するロボティック・クラウド・バイオロジー構想
谷内江望准教授の研究チームらが参加する国際コンソーシアムRobotic Biology Consortiumによるロボット群衆によって生命科学実験を推進するコンセプト「ロボティック・クラウド・バイオロジー」がNature Biotechnology誌に掲載

[テレビ・ラジオ出演]

2017年4月22日

【NHK Eテレ】SWITCHインタビュー 達人達(たち):「福島智×柳澤桂子」
◇福島 智 教授(バリアフリー分野)

[新聞掲載]

2017年4月25日

【朝日新聞】汚染土 再利用へ実証開始 福島・南相馬 環境省が安全性調査「基準」乱立 活用先も課題◇児玉 龍彦 教授(システム生物医学分野)

2017年4月23日

【朝日中高生新聞】夢ナビ! お仕事リポート◇櫻井 健志 特任講師(生命知能システム分野)

2017年4月21日

【日本経済新聞】内閣官房の研究(下)省庁人事も官邸主導 過剰な忖度生む懸念◇牧原 出 教授(政治行政システム分野)

2017年4月18日

【日本経済新聞】経済教室「米国のシリア攻撃展望は 米政策の不可測性に長短」
◇池内 恵 准教授(イスラム政治思想分野)

2017年3月10日

【産経新聞】日本の議論=音楽教室から著作権料◇玉井 克哉 教授(知的財産法分野)

2017年3月5日

【東京新聞】小学生対象の障害児教育 突出した能力発掘へ◇中邑 賢龍 教授(人間支援工学分野)

2017年2月26日

【朝日新聞】科学の扉 異常気象の背景探る 一温暖化の影響、計算で明確に◇小坂 優 准教授(気候変動科学分野)

2017年2月16日

【朝日新聞】共生社会とは 国会で議論「生きていていいと、党派超え発信を」◇熊谷 晋一郎 准教授(当事者研究分野)

2017年2月12日

【朝日新聞】量子で超高速計算 ースパコンしのぐ能力に期待一 ◇中村 泰信 教授(量子情報理工学分野)

2017年2月10日

【日刊工業新聞】未来を拓く にっぽんぶらんど 日本力 企業の研究開発(4) 一技術者にリーダー経験を一 ◇馬場 靖憲 教授(科学技術論・科学技術政策分野)

2017年1月31日

【読売新聞】生活調へ隊 障害者の短時間雇用広がる 一業務固定し、週4-8時間◇近藤 武夫 准教授(人間支援工学分野)

[雑誌掲載]

2017年4月10日

【中央公論】2017年5月号◇新たな情報ツールがもたらした変化 デマゴグの“事実”を、なぜ信じてしまうのか◇佐藤 信 助教(政治行政システム分野)

2017年4月27日

【現代思想】2017年5月号◇特集:障害者 一思想と実践 一 ◇熊谷 晋一郎 准教授(当事者研究分野)

2017年4月17日

【週刊東洋経済】2017年4月22日号◇フォーカス政治:日本人はなぜ生活苦でも「社会に満足」なのか◇牧原 出 教授(政治行政システム分野)

2017年3月

【実験医学 増刊号】生命科学で使える はじめての数理モデルとシミュレーション◇DNAバーコードによる生命科学実験の限界突破◇谷内江 望 准教授(合成生物学分野)

新 刊

BOOK

『舞台をまわす、舞台がまわる 一山崎正和オーラルヒストリー』

山崎 正和 (著)、御厨 貴、阿川 尚之、苅部 直、牧原 出 (編) / 中央公論新社 / 2017.3.22 刊

『グローバルヘルスのためのフレームワーク』

ローラ・J. フロスト 他(著)、樹田 祥子 他(訳) / 明石書店 / 2017.3.7 刊

『二つの政権交代 政策は変わったのか』

竹中 治堅(編)、牧原 出 他(著) / 勁草書房 / 2017.2 刊

先端研ウェブサイトでも最新の活動状況をご覧ください

知られざる先端研

<Happy Hour 編>

毎月第4金曜日の夕方、14号館先端研カフェから何やら楽しそうな声が聞こえ出します。はてさて、一体これは…？



仕掛人
谷内江 望 准教授

サイエンスは確実に少なくない割合がお酒によってドライブされており、繋がって世界に何度も素晴らしい変革をもたらしてきました。私たちが居酒屋でビールジョッキ片手に自分達の仕事と信念をぶつけ合うことがあります。イギリスでは大学の側のパブで研究者達は議論すると聞きます。ボストンに拠る様々な研究所も毎週金曜日の夕方に持ち回りで研究室がビールをホストする公式のハッピーアワーを開催しています。お酒の力を借りて、自分が真に何をしたいのか、何者でありたいのか語り合うことはとても大切なことであり、それは異なる分野でトップランナーとして活躍する先端研の研究者、それに学ぶもの、それを支えるもののコミュニティーであれば尚更であります。

ということで、ある日の教授総会で勇気を出して手を上げて「ハッピーアワーを先端研でもやりましょう」と提案してみたところ前所長、現所長をはじめとして「いいですね」と声があがり(とてもうれしかった)、もう1年半も毎回100名近くが集まるイベントになっています。こだわりのルールは2つ。毎月ホスト研究室は外部の人が見ても「先端研ってユーモアと気品があっていいな」と思えるポスターを彼方此方に貼ること。また1時間でしっかり終了、日本特有のダラダラ飲みではなく、世界を先導する先端研であるからこそタイムマネジメントに長けた格好いい飲み方をする事です。

ホスト研究室作・個性あふれる歴代ポスター(ほんの一部)



プロレス広告？西成研&石北研



視力回復効果あり、児玉研&岡本研



「黒」がテーマの近藤研



両PIの専門をうまく盛り込んだ油谷研&中村・小坂研



このテイストで全5種類！中村・宇佐見研&事務部

テーマに沿った(?)演出の数々



レストラン顔負けの中邑・近藤研のおもてなし(自作！)



バルーンを使った楽しい演出

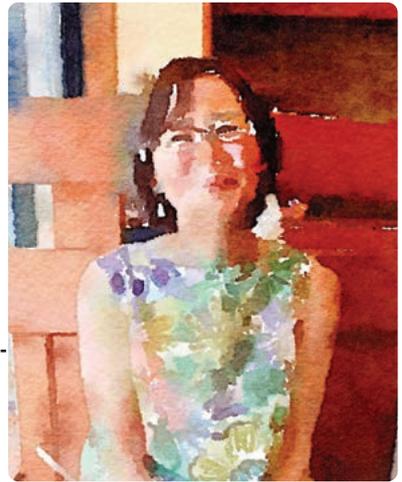


なぜか「婚活テーブル」まで登場

先端とは何か

コミュニケーション科学分野

田中 久美子 教授



先端研に着任して一年が経った。着任時には、前所長に「感無量」とお言葉をいただき、「コミュニケーション科学分野」に対する多くの先生方の御心と御期待を感じ、身の引き締まる思いであった。当初は右も左もわからなかったが、現所長が何かと気にかけてくださり、小さいながら何とか研究室として滑り出すことになった。

多種多様な人々が所属する学際的な組織は、刺激的で居心地がよかった。30年ぶりに再会した東大ピアノの会の先輩は日本を代表する政治学者になっていた。医化学系の先生方から新しい視点をいただき、不思議な慣例として福島のお米10kg購入した。つまらないことで下を向いていると、バリアフリー分野の先生に上を向くエネルギーをいただいた。家族構成の観点から、根っここの部分を共有できる先生方との出会いがあった。多くの先生方に暖かい御配慮をいただき、背景とする視点の差が新鮮であった。

先端研では、楽しいアクティビティもいろいろと行われている。国会やイスラムの政治状況を寄席で定期的に学んだ。ハッピーアワーと称する一月に1時間だけのハッピーな機会がある。2017年は先端研30周年でもあり、猛烈な若手の先生たちが未来を熱く語りまくる対談をとりまとめたりもした。次第次第に先端研の粋で破天荒な伝統に馴染んできた。

このいかにも楽しかった一年を振り返って思うことは、先端研は、日本の学界の中で残された数少ない秘境のうちの一つであろうということである。そのような場所であることは、外部からは(東大組織内にいても)わからなかったことである。文理融合をうたう組織は他にもあろうが、同じ文理融合でも、先端研は文系も理系も社会基盤に根付いた良い意味での固い分野を担っている。インフラから多種多様であるということは、既製の考え方が通用せず、より基礎

的などところからの相互理解を目指す必要があるということだろう。さまざまな社会的要請から、個人にも組織にも課される制約は増大する一方である中、先端研は、多様性を力として秘境を守っているかに見える。幹部の戦略と防御の下で個々の先生は精神的に自由である。そして、自由であるということはもちろん過ごした年月に対して責任をとるということでもある。

今回、「先端とは」との題に対してふと思いついたのは以下のドゥルーズの言葉である。

自分が知らないこと、あるいは適切には知っていないことについて書くのではないとしたら、いったいどのようにして書けばよいのだろうか。まさに知らないことにおいてこそ、かならずや言うべきことがあると思える。ひとは、おのれの知の尖端でしか書かない、すなわち、わたしたちの知とわたしたちの無知とを分かちながら、しかもその知とその無知をたがいにまじわらせるような極限的な尖端でしかかかないのだ。そのような仕方ではじめて、ひとは決然として書こうとするのである。(『差異と反復』の「はじめに」から)

哲学者が書く態様とは異なるろうとも、何か先端的なことを為そうとする時には、「知と無知をたがいにまじわらせるような極限的な尖端で」こそ活動するのであろう。このドゥルーズの言葉は、学問活動における自分自身に対する戒めでもある。が、それ以上に、先端的であることの有り様を一般的に述べているとも捉えることができるだろう。自分の無知を先端研で他者の優れた知と交わせ、先端研でなければ届き得ない尖端に達することができればと考えている。

『ブレイクスルーへの思考 ～東大先端研が実践する発想のマネジメント』

広報誌の人気連載だった異分野研究者対談『喧研譚学』が2016年12月に書籍として出版されました。広報誌には掲載しきれなかった内容を完全収録。先端研の研究者たちが、日常の仕事や生活でどのような壁にぶつかり、どのようにそれを打ち破ってきたか。研究成果からだけではわからない、研究者のパーソナリティや生活も垣間見れるような、普段語られることのない貴重なストーリーも盛り込みました。



▲著者見本が届き、開封の儀を行う神崎所長



巷の反応は？

日刊工業新聞『話題の本』

2017年1月25日掲載

書籍全体について紹介。

「ワクワク感あふれ、内容が実にスリリングだ。読み始めたとき、本の中にいた。まさに粒揃いの対談集。」

産経新聞『ビジネスパーソンの必読書』 2017年2月19日掲載

西成活裕教授と熊谷晋一郎准教授の対談について紹介。

「両者の研究に共通するキーワードは「自律」。複雑化する現代社会をマクロ的にコントロールするのは難しい。個々の「自律」によって諸問題に立ち向かう方が有効ということだろうか。」

書評サイト『HONZ』

2017年2月2日掲載

児玉龍彦教授と福島智教授の対談をメインに、書籍全体を紹介。

「縦横無尽に展開されるさまざまな分野の話にも読者がおいていかれることなく、研究の最前線の知的興奮を堪能できるのは、先端研の所長がインタビュアーとなり、研究者たちの言葉を分かりやすくわたしたちの社会と関わりのある形に翻訳しているからだろう。あなたの脳に直接働きかけてくるような、刺激の強い研究分野がたくさん紹介されている。研究の世界の豊穡さを味わえる。」

対談者と対談タイトル

- 人がやらないことこそ面白い 西成 活裕(数理創発システム)
- 個性と歴史が織りなすまちづくり 西村 幸夫(都市保全システム)
- ニーズを組み合わせで新しい価値を生み出す 森川 博之(情報ネットワーク)
- 誰かがやらなければならない 石北 央(理論化学)
- 「単純化」の罠に陥らない 児玉 龍彦(システム生物医学)
- 再生可能エネルギーの開発は学問の総合格闘技
- それぞれのリーダーシップ 馬場 靖憲(科学技術論・科学技術政策)
- 飯田 誠(エネルギー環境)
- 差異を超えて伝えるコミュニケーション 福島 智(バリアフリー)
- すべての経験の集結としての開発 浜窪 隆雄(計量生物医学)
- 客観視することで困難を克服する 熊谷 晋一郎(当事者研究)
- 先行研究と議論の結実 中村 泰信(量子情報物理学)

『ブレイクスルーへの思考 ～東大先端研が実践する発想のマネジメント』 本体価格:2,200円 東京大学出版会

東京大学先端科学技術研究センターについて

2017年に発足30周年を迎える東京大学先端科学技術研究センター(略称:先端研)は、「科学と技術のハーモニーで人と社会をつなぎ、未来を形にすること」を使命とする研究所です。最大の特色は研究者や研究分野の多様性にあり、理工系の先端研究から社会科学やバリアフリーという未来の社会システムに関わる研究まで、基礎から応用に至る多様な研究を積極的に推進しています。

先端研ニュース 2017 Vol.2 通巻99号 発行日:2017年5月23日

ISSN 1880-540X

© 東京大学先端科学技術研究センター
転載希望のお問い合わせ
press@rcast.u-tokyo.ac.jp

発行所: 東京大学先端科学技術研究センター 〒153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 <http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp>
編集: 広報委員会[中村尚(委員長)、岡田至崇、高橋哲、池内恵、ティクシエ三田アニエス、巖淵守、谷内江望、セツ ジョイオン、村山育子、山田東子]
表紙: 30周年を機に刷新した先端研ロゴマーク(デザイン:神原秀夫)

この冊子は植物インキを
使用しています。